『FATE』～不機嫌な死神～

R-third

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ＦＡＴＥ』～不機嫌な死神～

【Ｎコード】
Ｎ１６７０Ｍ

【作者名】
Ｒ－ｔｈｉｒｄ

【あらすじ】
サラとの別れから、約３年。英知は医学部の２年生になっていた。何かと忙しい毎日を送っていた彼の前に、一人の男が現れ…。

こちらは、『不機嫌な死神』の続編になります。
前作を読んで頂いていない方には、ちょっと意味不明な作品かもです。
でも、どうしても書きたかったので、書きます（笑）

更新は、のろのろになりそうですが…。
今回は前作と違い、グロ表現はありません。
（…たぶん。）

プロローグ　契約？

ハヤク！ハヤク！ハヤク！

スベテノキオクヲ　トリモドシテ！

スベテノココロヲ　トリモドシテ！

…オマエハ　ダレダ？

ワタシハ『　　』。

マダ　ワカラナイ？

ワタシハ『　　』ヨ？

オネガイ、ハヤクスベテヲ　オモイダシテ！

…テオクレニナル　ソノマエニ。

アルバイトの帰り道、突然現れた一人の男に声を掛けられた。
「そこのお兄さん！いい仕事があるんだけど、やってみる気、な～い？」

そう言ったその男は、恐ろしいまでに整った顔をしていた。
肌は、男性としてはかなり白い方だが、不健康な印象はない。
長い睫毛に縁どられた黒く大きな瞳。
鼻はスッと高く、少し大きめだが形の良い唇は、ほんのり朱を帯びている。
ふわふわとカールした艶やかな黒髪は、まるで天使を思わせる。
黒のスーツの中にはグレーのYシャツを着ているのだが、その胸元のボタンは3つほど開けられていた。
そして彼の首元には、すべては見えないがネックレスのようなものが掛けられていた。

…怪しい。怪しすぎる。
絶対これ、ホストかなんかの勧誘だろうっ！？

俺はその男を無視することに決め、彼を置いてスタスタと歩き始めた。
しかし彼はめげることなく、ふらふらと俺についてきた。

「…すみません。興味、無いんで。」
俺が答えると、男は残念そうに言った。

「ほんとにぃ？時給、割といいんだけど？」

「ホント、興味ありませんから！」
俺がそう答えても、男はしつこく付き纏った。

「ん～、別に怪しい仕事じゃないんだよ？
ただ、ある女性を５日間、世話してやって欲しいんだ。
彼女が望む所へ、連れて行ってやるだけでいいんだけど…。
アイツ、世間慣れしてないから…。」

ホストより更に胡散臭いその仕事内容に、俺は目を見開いた。
やっぱり、無視だ。無視しようっ！
俺がそう考えたその時、男が呟くように言った。

「…ちぇっ、駄目か。
彼女っていうのは、この辺を担当してる死神で、『サラ』っていう女の子なんだけど。」

俺がその言葉に反応して足を止め、思わず振り返ると男はニヤリと笑って言った。
「…時給は９５０ＤＥＡＴＨ。支払いは、死後払いで！」

それから男は真っ黒なリュックの中から、一枚の契約書の様なものを取り出した。
「じゃ、ここにサインを。印鑑が無かったら、ここもサインでいいから！」
慌てた様子でそう言うと、男は俺にその用紙を手渡した。

その文面を読もうとしたが、読む事は出来なかった。
…それは、見た事もないような文字で書かれていたから。

「…本当に、サラに逢えるんですか？」
俺が聞くと、彼は優しい表情で微笑んだ。

「…ああ。逢えるよ？でも、早くしないと、アイツが来ちまうかも…。」
男がそう言った瞬間、一陣の風が吹いた。
驚いてそちらを振り返ると、灰色の翼を広げて空を舞う、一つの影が視界に入った。

「ホラ、早くっ！アイツに邪魔されちまうぞっ！」
男は俺を急かした。
俺は訳が分からなかったものの、その用紙に二ヶ所、サインした。
これで少なくとも5日間は、彼女と一緒に居られると思ったから。

「なっ！？てめぇら、何こそこそしてやがんだよっ！？」
彼女は凄まじい形相でそう叫んだ。
それはもう、この世のものとは思えないほど、恐ろしい表情で…。
しかし男は何処吹く風で、その契約書をひらひらとさせながら笑った。
「…サラ、一歩遅かったな。契約、成立だ！」

「リューキっ！てめぇ、何考えてやがるっ！？
しかも、英知まで巻き込みやがってっ！」
サラはそう言うと、男に掴みかかった。

「…何って。勤続１０周年のご褒美を！」

そう言うと男はポケットからクラッカーを取り出し、サラの方に向かってその紐を引いた。
その瞬間、『パンっ！』という軽快な音と共に、中から綺麗な紙吹雪が飛び出した。

プロローグ　契約？

唖然とする俺達を尻目に、男は続けた。

「5日間も、休めるんだぞ？
折角だからこの機会に、人間界を旅行してくるのもいいんじゃないか？
この１０年、ろくに休みも取れなかっただろう？
それに、特別手当も出る事だし…。」

「『特別手当』？」
それを聞いたサラの瞳が、キラリと光った。

「ああ。俺が交渉してやったから、なんと２０万ＤＥＡＴＨも出る事になったぞ？
それと俺からのご褒美として、５日間この男を案内役として付けてやろう！」

そう言うと彼は、得意げに腰に手を当て、反り返った。

「…何が、俺からのご褒美として、だ？
特別手当と休みの事はともかく、英知を巻き込みやがったのは、やっぱり許せねぇっ！」

そう言うと彼女は、リューキさんに殴りかかった。
…なんかサラ、凶暴性が増してないか？
彼はそれをひょいと避け、眉間に皺をよせて言った。

「女の子が、グーでパンチはないだろう？
俺はお前を、そんな子に育てた覚えはないぞ？」
それを聞いた彼女は、怒りをあらわにした表情で言った。
「ふざっけんなっ！てめえに育てられた覚えなんか、ねぇよっ！！！
それにこいつの事、どうやって調べやがったっ！？
リューキに話した事、無かったよなぁ？」
リューキさんはちょっと溜息を吐き、それから困ったように微笑んで言った。
「全くもう…。たまたまだよ。
彼が歩いてるのを見掛けて、お前の世話係にちょうどいいかなぁと思って、声を掛けてみただけ。　お前達が知り合いだなんて、ホント知らなかったなぁ！」
「…嘘くせぇ！そんなの、信じられるかよっ！」
サラはまたリューキさんを睨みつけ、忌々しげに言った。
「そんな事、どっちでもいいだろう？
それよりお前は、この男と一緒にいられるのが嬉しくないのかよ？」
彼はニヤニヤと、いやらしい笑みを浮かべて言った。
「…なっ！？…う、うるせぇよ、リューキっ！てめぇには、関係ねぇ。」
サラは顔を真っ赤にして、小さく呟くように言った。
…か、可愛いすぎるよ、サラ。

それからも彼らは、俺を無視して同じような会話を続けた。
…あの、俺の事、忘れてませんか？
…3年ぶりの再会なんですけど。
俺がちょっとへこみながらその様子を見ていると、リューキさんが突然、こちらを振り返った。
「じゃ、明日から5日間、サラの事よろしくな？
勤務時間は、9時から17時で。
そのほかの時間は、好きに過ごしてくれていいから。
彼女と会うのも、明日から5日間だけは自由。…サラの事、頼んだよ？」
にっこりと微笑んでそう言うと、彼は大きな翼を広げた。
その色は、サラのものと同じ美しい灰色だった。
それから彼は大空に舞い上がり、消えていった。

プロローグ　契約？

「久しぶり、サラ。…君は本当に、変わらないね？」

俺がそう言うと、彼女は少し戸惑ったような顔に変わった。
でもすぐにニヤリと不敵な笑みを浮かべ、答えた。

「よぉ、久しぶり！…お前はちょっと、老けたんじゃねぇか？」

「…元気にしてた？」

俺が聞くと、彼女は唇をへの字に曲げた。
「まぁな！そもそも死神は、病気になんかならねぇしな！
そう言うお前は、どうだった？」

彼女は少し心配そうに、俺の瞳を覗き込みながら聞いた。
「お蔭さまで、元気にしてるよ。
それにサラとの約束も、無事叶えられそうだしね？」

「マジかよっ！？じゃ、ちゃんと医者になれそうなんだなっ！！」

俺が頷くと、サラは瞳をキラキラ輝かせ、嬉しそうに笑った。

「…良かったぁ！実は、かなり心配してたんだ。
お前、ちょっと頭悪そうだからさぁ！」

…口が悪いところも、本当に変わらない。
だけど、変わらない彼女を見て、とても嬉しかった。

「…サラ、逢いたかった。」

思わず抱きしめると、彼女は微笑み、俺の胸に顔を埋めた。
しかしサラはすぐに俺から身体を離し、唇を尖らせて言った。

「…私はまだ、仕事が残ってるから。」

「…うん。じゃあ明日は9時に、ここでいい？」

俺が聞くと彼女は嬉しそうに笑い、コクリと頷いた。

「おう、分かった。
…お前が死ぬまで、もう逢えないと思ってた。
もう一度生きてるお前に逢えて、めちゃくちゃ嬉しい。
…じゃあ、また明日っ！遅れんなよっ？」

そう言うと彼女は、灰色の羽を広げた。
久しぶりに見たその光景は、やはりとても幻想的で、そしてとても美しかった。
彼女はさっきの自分の発言が余程恥ずかしかったのだろうか、あっという間に空の彼方へ消えて行った。

「…また、明日。」

彼女の姿はもう見えなかったけれど、俺も小さく呟いた。
こんな約束、彼女と出来る日が来るとは考えもしなかった。

それから俺は、家庭教師のアルバイト先に連絡を入れた。
5日間の間、休ませて欲しいと伝えるために。

とても時給もよく、この仕事が気に入ってはいたけれど、これで首になったとしても後悔は無い。

生きている間はもう逢えないと思っていた彼女との、思い掛けない再会。
またしても期間限定ではあったものの、俺はとても幸せだと思った。

…もう一度、彼女に逢う事が出来て。
…もう一度、彼女を抱きしめる事が出来て。

この時の俺は、まだ知らなかったんだ。
これから始まる5日間が、彼女の運命を大きく左右する、とても大切なものだという事を…。

第一話　６時間前？

遡(さかのぼ)る事、６時間。
リューキは一人、喫茶店にいた。

その店は、東京都の遥か上空にある。
店の名前は、『Ａ　ｎｅｕｔｒａｌ　ｃｏｆｆｅｅ　ｓｈｏｐ』。
訳すると、『中立の喫茶店』。
この店では、争い事はご法度だ。
…天使も悪魔も、死神も。

「…アイツ、遅いな。
一体、何やってやがるんだ？」

彼は腕時計を見ると、小さく溜息を吐いた。
その時、一人の男性が現れた。

「ごめんごめん、遅くなって。
契約者が、ギリギリになって文句言い始めちゃったから。」

そう言うと男はにっこりと微笑み、リューキの前の席に腰を掛けた。

「…シュウ、言い訳は結構。時間にルーズな奴は、嫌いだ。」
リューキは男を、静かに睨みつけた。

「こわっ！！！でも、急に呼び出したのは、君だろう？
…こちらにも、都合というものがある。
で、用件は？何か用があるから、俺を呼び出したんだろう？」

シュウは嫌な笑みを浮かべ、聞いた。

「…ああ。実は、お前に相談があって。」

リューキは少し唇を尖らせ、答えた。

屈辱で堪らないといった雰囲気を、隠す事無く…。

ちょうどその時、ウェイトレスが水を持ってやって来た。

ウェイトレスの頭上には天使の輪が、背中には純白の羽がついている。

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりでしょうか？」

彼女はにっこりと微笑んで聞いた。

リューキがホットコーヒーを飲んでいたので、シュウも同じものを注文した。

「で、何？相談〜？…死神が、悪魔に〜？」

シュウが尚もニヤニヤと笑いながら、聞く。

「…ああ。お前以外、こんな事相談できる奴がいなくて。」

リューキが困った様にそう言うと、シュウは一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐにニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「仕方がないなぁ。聞いてあげるよ、リューキ君！」

それを聞いたリューキは、また悔しそうに唇を尖らせた。

しかし、大きく深呼吸をすると、リューキはゆっくりと語り始めた。

「実はこの、俺の部下の事なんだけど。

彼女は俺と、『同じ生まれ方』をしている。
死神になって、もうすぐ１０年。タイムリミットが、すぐそこまで来てる。」

リューキ一は枚の写真をリュックから取り出し、俯いて絞り出すような声で言った。
写真を受け取り、それを見たシュウは眉間に少し皺を寄せた。

「…この娘。『かわいい死神さん』じゃないか。
…やっぱり彼女、『君と同じ』だったんだな。」

そう言うと彼は、小さく溜息を吐いた。

「やっぱりって…。お前、サラに逢った事があるのかっ！？」
リューキは驚いた様子で言った。

「…ああ。３年ほど前かな？…おかしなペットを連れてた。」
シュウはクスクスと可笑しそうに笑い、答えた。

第一話　6時間前？

「…ペットだと？そんなもの、あの子には与えていないっ！」
リューキは彼に、疑う様な視線を向けた。

「信じないなら、それでも構わないさ。…でも、真実だ。」
そう言ったシュウの顔からも、先程までの笑みは消えていた。

「…まぁでも、もう手放したのかも知れないな。
あんなの連れて歩いてたら、そこら中で話題になってるだろうしね？」
シュウは今度は、不敵な笑みを浮かべ、告げた。

「…あんなのって、何だよ？動物じゃ、ないのか？」

リューキが、訝しげに問う。
シュウは静かに、ポケットから小さなノートを取り出した。
ページを開くと、触れてもいないのにそこに文字が浮かび上がった。

『魔王が　俺達の事を監視してる。
ここから先の情報が欲しければ、対価を寄こせ。
…でないと後々、お互い厄介な事になる。』

それを見たリューキは、眉間に皺を寄せた。
更にノートに、文字が浮かび上がる。

『対価って言っても、何も君の魂を寄こせと言ってるんじゃない。
なんでもいいから、とにかく差し出せ！』

その文字を読み、リューキはリュックの中を探った。

「…今は、こんな物しかない。これでも、構わないか？」

そう言うとリューキは、金色の豪華な紙に包まれた、小さな箱を取り出した。
それを見たシュウの瞳が、鋭く光った。

「…ほぉ、ＧＯＤＩＶＡのチョコレートか。
なかなか気の利いたものを持ってるじゃないか。
俺はこれに、目が無くてね…。
いいだろう、君の望む情報を与えてやろう！」

そう言うと、シュウは満足気な笑みを浮かべた。
その包みを受け取ると、彼はノートにふっと、息を吹きかけた。
瞬間、ノートからはすべての文字が消え去り、白紙に戻った。

それからシュウは、ゆっくりと己の記憶を思い起こした。
彼女と、そして彼女の『ペット』に出会った、あの日の記憶を…。

第一話　6時間前？

「お願いします。彼は私の事なんて、愛してはいない。
彼が愛してるのは、この身体だけ…。
それでも私、あの人の心がどうしても欲しいの。
そのためなら、貴方に魂を捧げる事も厭(いと)わない…。」

そう言うと依頼人は、静かに微笑んだ。
しかしその瞳の奥には、強い意志が宿っていた。

「いいだろう。では、君の望みを叶えよう！
…君のその、魂と引き換えに。」

シュウはニヤリと笑い、その申し出を受け入れた。

「では、契約の執行は今夜。
男が君の命を奪った、その瞬間だよ？」

女も満足気に笑みを浮かべ、答えた。

「…ありがとうございます。
あの人の心が手に入るなら、後はどうなろうと構わないわ。」

「さて、そろそろ時間か…。」

シュウは一人呟くと、目的の場所をイメージした。

その瞬間彼の身体は、契約者の部屋へと移動した。
既に事は起きた後で、そこには契約者の死体と、放心状態のまま天井を見上げている男の姿があった。
しかしその場にいたのは、その二人だけでは無かった。
部屋には、先客の姿があったのだ。

…死神か？随分と、おかしなヤツを連れてるようだが…。
まぁ、様子を見るとしよう…。

シュウは依頼人の部屋のソファーに、気配を消したまま腰を下ろした。
しかし次の瞬間、彼は己の目を疑った。

…何っ！？死神が、こんな表情を浮かべるだなんて…。
奴らにはそんな感情、与えられていない筈だろうっ！？

死神は、泣きそうな顔をしていた。
それは、有り得ない事だった。

何者なんだ、一体？
この娘も、彼女の側で呆然と立ちすくむ、この男も…。

シュウが唖然としている間にも死神は表情を消し、スカルのチャー

ムにそっと手を触れた。
死神の鎌に形を変えたそれで、彼女はゆっくりと女の首元目掛けて斬りかかった。
そこで漸く我に返ったシュウは、その場に姿を現して告げた。

「…ねぇ。その女、俺の獲物なんだよねぇ。
…勝手に手、出さないで貰えるかな？」

死神の連れらしき男は、突然現れた彼にかなり驚いた様子で振り返った。
一方死神は、真っ青な顔でシュウの事を見詰めた。

「…貴様。この女と契約してやがったのかっ！？」

少女の姿をした死神は苦々しげに眉間に皺を寄せ、不機嫌そうにシュウに問う。
シュウはにっこりと微笑み、答えた。

「御名答。そういうわけだから、手を引いてくれるかな。
…かわいい死神さん？」

そう言うと、シュウはゆっくりと大きな羽根を広げた。
死神のものとは違う、大きな漆黒の羽根を…。

「…もし、嫌だと言ったら？」

死神は小さな、でも強い意思をもった声で聞いた。

ほぉ、と呟くとシュウは眼を細め、彼女の方を値踏みするような目でじっと見詰めた。

そこで漸く、彼はある事実に思い当った。

「…お前、普通の死神じゃないのか。
成程ね。ここら辺は、あの男の担当エリアだったか…。」

「貴様、何を言ってやがるっ！？それに、あの男ってのは…。
まさか、リューキのことかっ！？」

死神の目が、大きく見開かれた。

「やっぱりな。アイツの部下なら、あり得ない話でもないか。
…普通の死神が、絶対に持ちえないモノを持った死神がいても。」

シュウは思わず、クスクスと笑った。
リューキがこの少女の死神を、とても大切に扱っていると感じたから。

「…それに、おかしなペットを飼っているようだしね？」
シュウは男の方に一瞥をくれた。

この男、まさか実体じゃないのか？
影もなければ、気配も感じられない…。

「…ペットなんかじゃない。私の、助手だっ！」
死神が不愉快そうにシュウを睨みつけた。

シュウはふわりと宙に舞うと、死神の眼前まで移動した。
そして、彼女の頬に両手を触れた。

それまで茫然と様子を見ていたが、それを見た男は我に返った。
彼もふわりと飛びあがり、シュウと死神のところまで移動した。

…やはり、実体ではないらしいな。

シュウは冷静に男の事を観察し、そう結論付けた。

「…やめろ、サラに触るなっ！」
男はそう言うと、シュウの手を払いのけた。

「…貴様、人間の分際で俺に歯向かうつもりか？」
シュウのテノールが、部屋に響く。

「…サラを、傷つけるって言うのなら。
お前が何者であっても、俺は全力で立ち向かうっ！」

男がそう言うと、シュウは思わず、プッと吹き出した。

「君達、ホント面白いなぁ！
君達の魂も、一緒にここで狩ってやってもいいんだけど。
でも俺、君達の事、ちょっと気にいっちゃったよ！
…だから、取引しない？」

シュウはまた、穏やかな笑みを浮かべて言った。

第一話　６時間前？（後書き）

第一話　6時間前？

「取引…？」
死神が、訝(いぶか)し気に聞いた。

「そうだよ。悪い内容じゃないと、思うんだけど…。
俺は、そこの女の魂を貰う。
君達は、ただそれを黙って見過ごしてくれるだけでいい。
そもそもその女は、既に俺と契約済みだから、違反にはならないだろう？」

彼女は目を瞑り、何かを必死に考えているようだった。
それから少しして、漸く死神は口を開いた。

「…いいだろう。
どの道一級悪魔のお前には、私の能力では敵いそうにねぇからな…。
そうすれば、私達には手出しはしないんだろう？」

また呆然と立ちすくむだけの男を尻目に、シュウは満足そうにニヤリと笑った。

「…ああ。約束しよう。」

そう言うとシュウはスーツのポケットに手を入れ、鞭を取り出した。
彼の鞭が、死んだ女の腹部目掛けて放たれた。

『バシッ』

鈍い音とともに、女の身体から、球体が飛び出した。
…赤く、鈍く光る、球体。
それを素手で簡単に捕えると、シュウは恍惚とした表情を浮かべた。
「…欲にまみれた人間の魂は、本当に美味そうだな。」
本当はさして興味も無かったが、敢えてシュウは言った。
…彼らの反応を、見る為に。
男はぎょっとした様子で、シュウの方を見た。
「…まさか、食うつもりなのか！？人間の、魂をっ！？」
シュウは特に驚いた様子も見せず、男の方を向いた。
「…そうだよ？だって俺は、悪魔だからね？
そこのかわいい死神さんみたいに、神の命令で魂を狩るわけじゃない。
…君のご主人様は、それを理解した上で俺にこの魂を譲ってくれたんだろう？」
そう言うと、ちらりと少女の方を見た。
死神は、悔しそうに唇を噛んで俯いていた。
…やはり、感情を持っているようだな。
…面白い娘だ。
死神はまた目を瞑り、言葉を選ぶように答えた。

「…ああ。それしか方法が、なかったからな。
それに女はコイツと既に契約済みだったから、仕方ねぇ。」

…そう、それでいい。
あの男のお気に入りに手を出したりしたら、後で何をされるか分かったものじゃないし。

シュウは、満足げに頷いて見せた。

「じゃあそろそろ俺は、行くとするかな？
あっ、そうだ！俺の名前は、シュウ。
二人とも、覚えておいてね！」

シュウは魂と鞭をポケットに入れると、ふわりと舞い上がった。
そして次の瞬間、彼は部屋から姿を消した。

「俺が知ってるのは、以上。参考になったかい？」
シュウは穏やかな笑みを浮かべ、リューキに言った。

「…ああ。予想外の収穫だ。ありがとう。
そう言えば、思い出したよ。
…彼女が笑顔を取り戻したのは、ちょうど3年ほど前だ。」

彼はそう言うと、コップの水を一口飲んだ。

「…しかし、管理不行届きじゃないのか？
相手が俺じゃなかったら、あの娘（こ）、絶対狩られてたぞ？」
シュウは眉間に皺を寄せ、静かな声で言った。
「…確かに、その通りだな。感謝する。
今後はそういう事がないよう、言い聞かせておくよ…。」
そう言うとリューキは、小さく溜息を吐いた。
それから二人は、店を後にした。
「じゃあな、リューキ君。武運を祈るよ！」
シュウはそう言うと、にっこりと微笑んだ。
「…お前はホント、いい奴だな。悪魔にしておくには、惜しいよ。
本気で死神に転職する気、ないか？」
リューキが笑顔で言うと、シュウは心底嫌そうに口元を歪めた。
「…馬鹿か、貴様。今度言ったら、本気で狩るよ？
それに悪魔にいい奴なんて、褒め言葉でもなんでもない…。」
シュウと別れた後、リューキは事務所に急いだ。
シュウの言う『ペット』の正体を探り、彼と接触を図る為に。
そしてサラのため、必要な書類と経費を準備する為に。

第一話　6時間前？（後書き）

前作では書けなかった、シュウ視点。
冷静な振りをしながら、結構困惑中の悪魔でした。

第一話　６時間前？

事務所に戻るとリューキは、まず男について調べ始めた。
シュウから得た情報を元に、膨大なデータの中からその内容を探す。
データを絞り込むため、様々なキーワードを入力していく。
そしてリューキは、漸くそのデータを見つけ出した。

任務：不履行。
理由：既に悪魔と契約済みだった為。
担当者：サラ

「…これだ。」
リューキは一人、パソコンの前で小さく呟いた。
それからそのデータを元に、その日の映像を探した。

パソコンのモニターには、その日の様子が映し出された。
その内容から、男の素性を探ろうとしたその時だった。

「…ねぇ、リューキ。その仕事、まだ時間がかかる？」
その声に反応して、リューキの肩がピクリと動いた。

…しまった。『あの方』がここに来られていたとは。

リューキは小さく舌打ちをすると、すぐに笑顔で後ろを振り返った。
「…こんにちは、神。こちらにいらしているとは、知りませんでしたよ？」

そこには彼の想像した通り、神の姿があった。
ジーンズにＴシャツというラフな洋服に身を包んだ、１０歳前後の

少年の姿をした神の姿が。
しかし、人を見た目で判断してはいけない。
彼はこう見えても『死神』と『天使』、両方を統べる者であり、唯一『魔王』と対等な存在として、天上界に君臨する。

「こんにちは！…で、何してたの、君？」
にっこりと微笑んで神は聞いた。

「…サラの事で少し、調べ物を。」
隠し通すことは難しいであろう事を考え、リューキは素直に神の問いに答えた。

「ふーん。サラの事で、ねぇ。」
そう言うと神はポケットに手を入れてキャンディーを取り出し、自分の口に放りこんだ。

「で、何を調べてたの？」
彼はまた、笑顔で聞いた。
…口をもぐもぐと動かしながら。
しかしそれは質問などでは無く、詰問といった方が相応しいような、そんな聞き方だった。

「実は、ある男の事を調べていて。
この男、3年ほど前にサラと接触しているようなのですが…。」
リューキが答えると、神はすっと目を細めた。

「…この事を調べるために、今日はあの悪魔と逢ってたの？
遊んで貰おうと思って、事務所まで来たのに。」
そう言うと神は、唇を尖らせた。

やっぱり、侮れないな。
こんな姿をしていても、抑えるべきところは抑えている。
リューキは小さく溜息を吐き、それからまた笑顔で答えた。

「…遊びに来られるのであれば、前もってご連絡頂かないと。
ちゃんと伺っていたら、きちんと準備もさせて頂いたのに。」

「…心配するな！ちゃんと、玩具は持ってきているぞ？
今、人間界ではこれが流行しているんだろう？」
瞳をキラキラと輝かせながら神は手を頭上に振り上げ、指をパチンと鳴らした。
その瞬間、ある物体が現れ、宙に浮かんだ。

「…それは、Ｗｉｉですね？ホント、よくご存じでいらっしゃる…。」
リューキは多少呆れながら、そう言った。
でも神は、満足気に笑った。

「なぁ、リューキっ！そんなのやめて、一緒に遊ぼうよぉ！
私は今、とても退屈なんだっ！」
駄々っ子のように、彼は言った。

「でも、この男について調べないと。もう少しだけ、待って下さいよ。」
リューキはまた、小さく溜息を吐いた。

「…溜息をひとつ吐くたびに、幸せが逃げるらしいぞ？
じゃあ、私がその調べ物、手伝ってやろう。それでいいだろう？」
そう言うと神は、パソコンのモニターにそっと手を触れた。

その瞬間、パソコンのモニターには男に関するデータが浮かび上がった。

『名前：斎藤　英知（えいち）
性別：男性
職業：学生』

他にも住所から趣味、家族構成から好きな食べ物まで、ありとあらゆるデータが表示されていく。

「もう、いいですよ。これだけデータがあれば、この男を探し出すことが出来る。」
リューキは笑顔で答えた。
神は満足気に笑い、言った。

「そうか？まだ、色々分かるんだけど。
じゃあリューキ、遊ぼうよっ！」

「まだ、駄目です。書類を作ったり、色々俺は忙しいので。」
リューキが答えると、神はその頬を膨らませ、言った。

「…ずるいよ、リューキっ！それじゃ、詐欺じゃないかっ！」

第一話　6時間前？

「…詐欺って、貴方。では、大急ぎで仕上げますから、すぐに承認印を下さいね？
　そうすれば、終わり次第遊んで差し上げますよ？」
リューキが胡散臭い笑みで答えると、神は顔を真っ赤にして言った。
「今度こそ、約束だからね？
　約束を破ったら、閻魔（えんま）の奴にその舌を抜かせてやるからっ！」
「…分かりましたよ。でも、少しだけですからね？」
リューキはまた小さく溜息を吐くと、諦めたように答えた。
書類を作っている間も、神はリューキの隣でにこにこと話し掛け続けた。
しかし彼は、突然真剣な表情に変わった。
「それってもしかして、彼女を『本来の場所』に戻すための作業？
　私は彼女の事も、かなり気に入っているんだけどなぁ…。」
神は、つまらなさそうに言った。
…まずい。神に邪魔なんかされたら、本当にアウトだ。
そう考えたリューキは、笑顔で言った。
神の興味を引きそうなフレーズを、敢えて選んで。
「そうですよ？だって、面白いとは思いませんか？

タイムリミットまでの間、この男がどんなふうに足掻いてくれるのか。」

その言葉を聞いて、神は瞳を輝かせた。
「…なるほど。それも、一興かもしれないなぁ。
…じゃあこの件は、リューキに任せるとしよう。」
そう言うと神は、ぴょんと椅子から飛び降り、叫んだ。

「お～い！おやつが無くなっちゃったよ。
クッキーか何か、な～い？」

第一話　6時間前？

書類が仕上がると、リューキは神にそれらを手渡した。
「…5日間の休みと、特別手当。それと、この男を彼女に付ける事、か。」
神はその契約書にさっと目を通すと、承認印を押した。
「なぁ、これでいいだろう？早く、遊ぼうよぉ！」
神がそう言った、その時だった。
部屋の扉がバンっ！という大きな音とともに開かれた。
「…見つけましたよ、神。やはり、こちらに居られましたか。」
にこやかに微笑みながら、一人の女性が部屋に入って来た。
「ひっ、ユ、ユメノじゃないかっ！一体、どうしてここに？」
神はこれ以上は無いという程顔を引き攣らせながら言った。
「…どうして、ですって？
貴方が仕事を放り出して、遊びに行ってしまったから探しに来たんでしょうっ！？
全く、貴方には本当に、自覚というものが足りないんですよっ！」
そう言うと彼女は神の襟元を掴み、ネコの様にひょいと抱えた。
「リューキっ！助けてよぉ！
私は君の仕事を、助けてあげたじゃないかぁっ！」
半泣きで、神は訴えた。
しかしリューキはまたしても胡散臭い笑みを浮かべ、答えた。

「…残念ですよ、神。私も貴方と遊ぶのを、楽しみにしていたんですけどね。
では、それはまた、次の機会に。私ももう、行かないと。
それと、私が嘘をついたんじゃないですよ？
仕事をさぼった、神がいけないんですからね？」

「ひどいよ、リューキっ！ず～る～い～っ！」
神の声が、部屋に響き渡った。
彼の秘書であるユメノは、静かな声で言った。

「…ずるいのは、誰ですか？それに、勝手にこんなにおやつを召し上がって…。
晩御飯が食べられなくなったら、一体どうなさるおつもりなんですか？」

それから神は、引きずられるようにして部屋を後にした。

…ラッキーだったな、ホント。
それにしても、天上界で最強なのは、神ではなくユメノかもしれないなぁ。

リューキはクスリと笑うと、椅子から立ち上がった。
それから一人、小さく呟いた。

「…感謝してますよ、神。
次回はちゃんと、遊んで差し上げますからね？」

そしてまた、リューキは大急ぎで部屋を飛び出した。
灰色の、大きな翼を広げて。

第二話　一日目。？

約束の場所に着いたけれど、彼女はまだ到着していないようだった。
…そりゃそうか。彼女が待ち合わせより早くに着くなんて、有り得ないよな…。
そう考えて俺は、苦笑した。
時計を見ると、その針は午前８時５０分を指していた。
あと１０分。１０分待てば、彼女にまた逢えるっ！
そう考えた、その時だった。

「なんだよ、お前。ニヤニヤして、気持ち悪いなぁ…。」

げんなりした感じの声が、辺りに響く。
ハッとして顔を上げると、そこにはサラが立っていた。

「…サラ！…まさか君が、時間より早くに現れるとは思わなかったよ。」

思わずそう言うと、彼女は真っ赤な顔で言った。

「別に、楽しみにしてたからとかじゃねぇからなっ！？
たまたま、ちょっと早く着いちまっただけだからっ！」

そう言うと彼女は、プイっと顔をそらした。

「でも、お洒落してきてくれたんだ？」

俺がそう言うと、彼女は先程よりも更に真っ赤になってしまった。
あまりにも素直じゃないその態度と、表情とのギャップに思わずク

スクスと笑ってしまう。

かわいらしい花柄のワンピースに、真っ白なコート。
そして、真っ白なブーツ。
どれもとても愛らしくて、思わず見惚れてしまいそうになる。
…背中には、いつもの真っ黒のリュックが担がれているんだけど。

「…なっ！？てめぇ、なに笑ってやがんだよっ！？
ふざっけんなっ！てめぇの為じゃねぇよっ！」

そう言うと彼女は、俺の事を睨みつけた。
しかしその顔は、相変わらず赤いままだ。

「…はいはい。分かってるよ。」

俺が尚も笑いながらそう言う横で、彼女は何やらぶつぶつと文句を言い続けていた。

俺は彼女が昨日言った通り、少し老けたのかもしれない。
あの時１６歳だった俺は今、１９歳になった。
…心も体も、あの時とは違う。

彼女の見た目は本当に、変わっていない。
３年前と、何ひとつ。恐ろしい程に…。

それは俺が『人間』であり、彼女は『死神』であるという、その現実を俺にまざまざと見せつけた。
でも俺はそれには気付かない振りをして、笑い続けた。
…そうしないと、この貴重な５日間が全て壊れてしまいそうで怖かったから。

「…ったく、いつまで笑ってやがんだよっ！？」
サラが俺を、睨みつけながら言った。
「…ごめんごめん。あんまりサラが可愛いから、つい、ね？」
俺がそう答えると、彼女はまた真っ赤になり、魚の様に口をパクパクさせた。
「それと、俺の名前は『てめぇ』でも『お前』でも無い。…『英知』だから。」
俺が真剣な表情でそう言うと、彼女は瞳を逸らした。
「…知ってるよ、英知。」
彼女は小さく、呟くように言った。
俺はそんな些細な事がとても嬉しくて、彼女を抱きしめた。
「…なっ！離せよ、英知っ！その癖、なんとかならねぇのかよっ！？」
サラは俺の腕の中で、ジタバタと暴れた。
「…ならない。だって、3年も逢えなかったんだよ？」
俺がそう言うと、彼女は大きな溜息を吐いた。
「…全く。お前はホント、どうしようもねぇな。」

それからサラは、俺の背中に静かに腕をまわした。
彼女は俺から身体を離すと、言った。
「今日から5日間、よろしくな！私は人間の世界の娯楽とか、あんまり知らねぇからさ…。」
「了解！で、何処か行きたい所とかはあるの？」
俺が聞くと、サラは嬉しそうに瞳をキラキラと輝かせ、言った。
「…温泉っ！すっげぇ気持ちいいんだろうっ！？」
俺は予想外の彼女の言葉に、少し唖然とした。
…それじゃ、二人で一緒に居られないじゃん。
でも、リューキさんにも言われてるから仕方ない。
『彼女の望む所』に連れていくように、ってね。
「…温泉かぁ。いいよ、別に。でも、どこがいいかなぁ？」
俺がそう言うと、彼女はニコニコしながらリュックからパンフレットを取り出した。
『鬼怒川温泉　一泊二日の旅』
…『一泊二日の旅』？
…これってつまり、二人でひとつの部屋に泊まるって事だよな？

俺が少し呆然としていると、彼女は言った。

「なぁ、二人で２万９，８００円だったら、安くねぇか？
食いもんも、美味そうだしっ！この資金は、私が出すからさぁっ！
…英知、駄目か？」

それから彼女は、凶悪なまでに愛らしい表情で俺を見上げた。
俺は大きな溜息を吐き、言った。

「…いいよ。ただし、旅費は割り勘で。
流石に全額出して貰う訳にはいかないからね？」

そして俺達は、旅に出た。
死神と一緒に温泉旅行。これって、相当貴重な体験だよな…。

でも俺、自分の理性にちょっと自信ないかも。
そんな事、死んでも彼女には言えないけどね。

第二話　一日目。？

「これが、電車か～っ！」

彼女はとても満足気に、笑顔で言った。
電車の中でブーツを脱ぎ、子供の様に窓の方を向いて座席に膝まづきながら…。

俺はそんな彼女を見て、またクスクスと笑ってしまった。
するとサラはこちらを振り返り、ぎろりと俺の事を睨みつけた。

「…なんだよ。文句、あんのかよっ！？」

「…いや、別に。サラ、電車に乗ったの、初めてなの？」

「…ああ、そうだな。移動手段として乗るのは、初めてだ。
まぁでも、仕事でちょっとだけ乗った事はあるけどな。」

そういうとサラは、少しだけ寂しそうな表情を浮かべた。
そんな彼女を放っておく事が出来ず、俺はただサラの頭をそっと撫でた。
すると彼女はまた鋭い視線を俺に向け、すこぶる嫌そうに口元を歪めて言った。

「…なんだよ、お前。私の事、子供扱いするんじゃねぇよっ！」

それからサラはブーツを履き直し、前を向いて座席に座りなおした。
そしてリュックの中から徐に先程のパンフレットを取り出し、ニヤリと笑った。

「しっかしホント、楽しみだなぁ！
リューキのお陰ってのが気にくわねぇけど、温泉、マジで一回行ってみたかったんだよ♪」
そう言うと彼女は、嬉しそうに俺の顔を見上げた。
俺はそこで、昨日から疑問に思っていた事を聞いてみた。
「…サラ。…あの人まさか、サラの恋人とかじゃないよね？」
するとサラは心底嫌そうに眉間に皺をよせ、また俺の事を睨みつけた。
「はぁっ！？なんで私があんな胡散臭い野郎とそんなもんにならなきゃいけないんだ？」
それを聞いた俺はかなりホッとして、それからまた彼女に質問をした。
「ははは、ごめんごめん！でもさ、ちょっと心配だったから。
だって、3年も離れていたんだ。
それにリューキさん、サラとめちゃくちゃ仲良さそうだったから…。」
「…馬鹿か、てめぇ。…大体あの男、普通の死神じゃねぇんだぞ？
あんな怪しい男、絶対私はイヤだねっ！」
「…普通じゃない？それって、一体？」

そこまで言って俺は、以前あった悪魔の言葉を思い出した。

『…お前、普通の死神じゃないのか。
成程。ここら辺は、あの男の担当エリアだったか…。』

『やっぱりな。アイツの部下なら、あり得ない話でもないか…。
普通の死神が持ちえない物…。意思や感情を持った死神がいても。
』

悪魔は確かにあの時、そう言った。
疑問に思いながら俺は、その事を忘れてしまっていた。

…サラは、『普通の死神』とは異なる存在なのだろうか？
そして『普通の死神』は、『意思』や『感情』を持たないものだろうか？

俺の目の前に居る彼女は、ちゃんと『心』を持っている。
…それは3年前に出会った頃以上に、明確に感じる事が出来る。

あの頃よりも現在のサラは、更に豊かな『感情』を得ている様に思えた。
真っ赤な顔や、嬉しそうな笑顔。
そして、少し寂しそうなあの表情。
…時折垣間見る事は出来ても、それは頻繁に現れるものではなかった筈だ。

全く変わっていない様に見えた彼女も、この3年の間に変化しているのだろうか？

そんな事を俺が考えていたら、彼女が少し不安そうに言った。

「…なぁ、英知。アイツとはホントに、何もないから。
リューキはいうなれば、私の保護者みたいなもんだからさ。」

その言葉に俺は漸く我に返り、笑顔で答えた。

「…そうか、サラ。ごめん、変な事言って。
でも、もうひとつだけ教えてくれないか？
…リューキさんは、どういうところが『普通じゃない』の？」

すると彼女はまた少し眉間に皺をよせ、言った。

「…あの男、どうも神が作ったんじゃないみたいなんだ。
…だからアイツ、他の奴と違って時々神に反抗したり、死神のルールを破ったりするんだ。
まぁ私も、詳しい事はよく知らないんだけどな。」

第二話　一日目。？

「えっ？それじゃあサラ達死神は、神様が作ったの？」
俺は突然出てきた『神』という単語に、少しぎょっとした。

「…ああ。お前達人間は勝手に繁殖するだろう？
でも私達死神は、違う。
神が気が向いたときに手間暇かけて作る、特別なロボットといったところか…。
だから私達は無駄に整った見た目をしているし、神の言う事には絶対に逆らえない…。」

そう言った彼女は、今にも泣き出しそうな表情を浮かべていた。
だから俺は、彼女に言ったんだ。
…彼女のこんな顔を見たくなくて、わざとふざけた調子で。

「サラは、ロボットなんかじゃないよ。
それに君だったら、嫌な仕事は神様の命令でも絶対断りそうだしねぇ？」

クスクスと笑いながらそう言ったんだけど、サラはいつもの様に俺を睨みつける事もなければ、怒鳴り声を上げる事もなかった。
その代わりに彼女は、静かに言った。

「…私はなんで、死神なんかに生まれちまったんだろう？
…この運命を受け入れる事しか出来ないって、分かってはいるんだけど。」

それから彼女は俺の肩に頭を乗せ、そっと瞳を閉じた。

俺は何も言ってあげる事が出来なくて、ただ静かに彼女の頭を撫でた。
それから俺も、静かに瞳を閉じた。
俺は気がつくと、夢の中にいた。
…夢の中の彼女は、普通の人間で。
俺達は楽しそうに笑って、普通にデートをしていた。
当り前の様に手を繋ぎ。当り前の様に抱き締めあって。
…当り前の様に、次に会う為の約束をしていた。

こんな事、現実では有り得ないっていうのに。
彼女は死神で、俺は普通の人間だから。
…この5日間が終われば、俺達はまた逢えなくなってしまうのだから。

そう思うと俺は、凄まじい喪失感に襲われた。
隣を見ると、サラはまだ静かに寝息をたてている。
彼女を見詰めながら俺は、そっと心の中で呟いた。

…誰よりも優しくて純粋なのに、君はなんで死神なんかに生まれてしまったんだろう？
…この運命を受け入れる事しか、俺達は本当に出来ないのかな？

こんな事を今更言ったところで、どうにもならないことは俺にも分かってはいたけれど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1670m/

『FATE』～不機嫌な死神～

2011年5月1日12時34分発行